

The Situational Similarity between “- soo da” and “- yoo da” in the Japanese Language

Yukiko Muramatsu

Abstract

The purpose of this paper is to describe the situational conditions wherein both the Japanese expressions “- soo da” and “- yoo da” can be used. The expression “- soo da” has two meanings, namely, “appearance” and “hearsay.” Similarly, “- yoo da” also has two meanings: “conjecture” and “simile.” Although the meanings of both expressions are different, there are cases wherein both can be used in the same situation under some conditions. This paper clarifies that such a situation involves the possibility of the above expressions being interpreted either as a “possible world” (Kikuchi 2000) or as reality.

「そうだ」「ようだ」の場面共通性について

村 松 由起子

1. はじめに

「そうだ」には様態と伝聞の二つの用法があり、「ようだ」には推量と比況の二つの用法があるとされる。「そうだ」「ようだ」はそれぞれ異なる表現であるが、同じ場面で使用できる場合があるため、「そうだ」「ようだ」で表わされる意味の違いについて、先行研究⁽¹⁾でも論じられてきた。

例えば、次の(1)(2)のa、bは同じ場面で使用することが可能である。

- (1) a. 駅前に何かできそうですね。
b. 駅前に何かできるようですね。
- (2) a. 具合が悪そうですね。大丈夫ですか。
b. 具合が悪いようですね。大丈夫ですか。⁽²⁾

このような「そうだ」「ようだ」とも使用可能な場合について、先行研究では両者がどのように異なるのかという視点から、意味の違いが考察されてきた。本稿では、そもそも異なる「そうだ」「ようだ」がどのような場合に両方の表現とも使用できるのか、この二つの表現が両方とも成立する場面にはどのような条件があるのか、について考察する。

なお、次の(3)のように、「ようだ」の表現と伝聞の「そうだ」の表現が似ている場合もあるが、庵他(2000)⁽³⁾でも説明されているように、様態の「そうだ」と伝聞の「そうだ」は基本的に別の用法であるため、「そうだ」に関しては、本稿では様態の「そうだ」のみを扱っていく。

- (3) a. 今度の新しい課長、海外生活が長かったそうですよ。
b. 今度の新しい課長、海外生活が長かったようですよ。

また、「そうだ」の否定形は「～なさそうだ」「～そうではない」と複数あり、先行研究でも論じられているように意味にも差があるため、本稿では扱わないことにする⁽⁴⁾。

2. 先行研究

まず、「そうだ」「ようだ」に関する先行研究を概観しておく。いわゆる様態の「そうだ」から見ていくことにする。

砂川他（1998）では、いわゆる様態の「そうだ」を、「様態」「生起の可能性1」「生起の可能性2」の三つに分け、順に「話し手が見たり聞いたりしたりしたことから判断した様態を表す」、「なる」「落ちる」などの意志を表さない動詞や「書ける」「眠れる」などの可能を表す「V-れる」に付いて、そのような出来事が起こる可能性が大きいという判断を表す、「第三者の意志的な行為を表す動詞に付いて、そのような出来事が起こる可能性が大きいという判断を表す」と説明している。以下は砂川他の用例（頁及び用例番号を付す）の一部であり⁽⁵⁾、(4)(5)は「様態」、(6)(7)(8)は「生起の可能性1」、(9)(10)は「生起の可能性2」の用例である。

(4) その映画はおもしろそうだ。<166(1)>

(5) おいしそうなケーキが並んでいる。<166(3)>

(6) 星が出ているから明日は天気になりそうだ。<167(1)>

(7) 服のボタンがとれそうだ。<166(3)>

(8) 暑くて死にそうだ。<166(7)>

(9) あの様子では二人はもうじき結婚しそうだ。<168(1)>

(10) 彼はもう10日も無断で休んでいる。どうも会社を辞めそうだ。<168(2)>

なお「生起の可能性1」である(8)については、程度がひどいことを比喩的に表す慣用的な言い方の例としている。

菊池（2000）は、これら「そうだ」の用法に共通する基本的な意味を考察し、各用法の「そうだ」は共通して次の二つの条件を満たす場合に使われると分析している。

①話手がある<可能世界（=確認・確定された現実とは区別して捉えられた世界）>を思い描いて述べる

②<現実>がそのような<可能世界>を思い描かせるような性質をもっている（と話手が感じ取っている）[また、<現実>がそのような性質をもつことを話手が描写する]

上記<可能世界>として、菊池は次の5つのケースを挙げている。ここでは各ケースに菊池の用例を一例ずつ付しておく。

ケース1：<まだ現実のものとなっていない次の局面（次の絵）>

雨が降りソウダ。<16(1)>

ケース2：<自分が直接経験していない場面>

「あの子どもたち、どうしてるかな。何をさせても頼りないからなあ」

「彼らのことだから、警察のお世話になっていたりしソウダな」<18(6)>

ケース3：<自分が直接経験していない感情・感覚>

A君は、就職が決まってうれしソウダ。<16(2)>

ケース 4：〈やがて確認が得られたとした場合、その局面〉

[店頭で商品のコートを見て] このコートは僕にはどうも小さソウダ。<19(9)>

ケース 5：〈仮想世界〉

[この地に] 長くいると淋しくなりソウである。<20(13) 田野村(1992)からの引用>

菊池はさらに、「そうだ」使用の許容度は〈可能世界〉の思い描きやすさによるとし、同じ表現でも場面によって思い描きやすさが変われば許容度に差が生じる例を挙げている。

(11) ?? 「ここの鬼監督は選手を棒で殴るんだそうだ」「そりゃ、痛ソウダな」<22(25)>

(12) ? 「ここの鬼監督は選手を棒で殴るんだそうだ」「この棒? こりゃ、痛ソウダな」<22(26)>

(13) [監督が選手を殴るのを見て] 痛ソウダな。<22(27)>

この (11)(12)(13) の許容度の差が生じる理由については、「〈可能世界〉(この例なら、自身の直接経験していない感覚(痛さ))を思い描きやすい程度(思い描かせる性質を〈現実〉がどのくらいもっているかの程度)の違いが、許容度の差になっていると見られる例である。殴られる場面を目の当たり見ている(13)はごく自然であり、棒を見ているだけの(12)も((13)とは多少の差があるかと思うので?を付したが)許容範囲内であろう。これに対し、棒も見ずに単なる伝聞として話題にする(11)では、ソウダは使用しにくい。まさに、思い描きやすさの差といってよかろう。」と説明している。

つまり、「そうだ」は使用される場面によって〈可能世界〉の思い描きやすさが変われば、同じ表現でも許容度が変わってくるということになる。本稿の考察でも「そうだ」については、〈可能世界〉の思い描きやすさによる許容度の差を考慮しながら、各用法に共通するこの菊池の二つの成立条件に従って考察を進めていく。

次に「ようだ」について見ていく。

前述の砂川他では「ようだ」の「推量」と「比況」の用法を次のように記述している⁽⁶⁾。

「推量」の用法については「ものごとについて話し手がもつ印象や推量的な判断を表す。ものごとの外見や自分の感覚について「何となくそんな感じがする／そのように見える」というふうには、その印象や外見をとらえて表現するもので、話し手の身体感覚・視覚・聴覚・味覚などといったものを通してとらえられた印象や様子を述べたり、そのような観察を総合して話し手が推量的な判断を述べるような場合に用いる。」とし、「比況」の用法については「ものごとの状態・性質・形や、動作の様子を、本来はそれと異なる他の何かにととえて表現するのに使う。同類の似た性質のものごとにととえる場合だけでなく、全く別の架空のものにととえる場合もある。」としている。以下、(14)(15)は「推量」、(16)(17)は「比況」として挙げられている用例の一部である。

(14) あの人はこの大学の学生ではないようだ。<618(1)>

(15) どうも風邪を引いてしまったようだ。<618(5)>

(16) 男は狂ったように走り続けた。<616(3)>

(17) 身を切るような寒さが続いている。<616(9)>

なお、「比況」には「雲をつかむような話」のような固定化した慣用的な表現も含まれている。一方、「そうだ」にも、前掲(8)「暑くて死にそうだ」のように、比喩的な用法があるので、「ようだ」の比況との違いを明らかにする必要がある。比喩的な「そうだ」「ようだ」が両方とも成立する場面があるか、あるとしたら、どのような条件の場合に両方とも成立するのかについては次章で考察していく。

以上、「そうだ」「ようだ」のそれぞれの用法を見てきたが、前掲(1)(2)のa、bが成り立つことからわかるように、この二つの表現には類似点もあるため、「そうだ」「ようだ」を比較した研究もある。

寺村(1984)は「そうだ」と「ようだ」の違いを次のようにまとめている。なお、寺村は様態ではなく「予想」ということばを用いている。

予想のソウダと、推量のヨウダを比べると、まずソウダのほうは視覚的、直感的に見たままをいうのに対し、ヨウダのほうは視覚、聴覚、その他の感覚により得た情報、あるいは周囲の状況も考慮に入れて推量した結果をいうという違いがある⁽⁷⁾。

また、菊池(2000)は、「そうだ」がなじまない例を挙げながら、「そうだ」と「ようだ」を比較している。

(18) *私はうれしソウダ。<21(19)>

(19) [食べ物をお口にしたら] *おいしソウダ。<22(20)>

(20) [人の容貌を直接観察して] *あの人、ずいぶん目が大きソウダね。<22(21)>

これらの用例が不適切な理由として、「<現実>をそのまま<現実>として述べる場合、ソウダはなじまない。(18)(19)は自身の感情・感覚なので<現実>のものとして「うれしい」「おいしい」と述べなければおかしい。(19)の場合、自身の感覚が不確かなら「おいしいヨウダ」とはいえるが、食べて、すでに思い描けなくなった後は「おいしソウダ」とはいえない。(20)はやはり<現実>を直接観察し、そのまま述べるケースなので、それが確実なら「目が大きいね」、不確実あるいは婉曲な述べ方なら「目が大きいヨウダね」となる。」と説明している。

つまり、「そうだ」は思い描く余地のない現実の場合には成り立たないが、「ようだ」のほうは現実であっても不確かな現実として述べる場合には成立するという違いがあることがわかる。

また、庵他(2000)には両方の表現が成り立ち、その区別が問題になる場合として、(21) a、bの違いに関する説明がある。ここでは「ようだ」が使えなくなる場合が取り上げられている。

(21) a. このケーキはおいしいようです。<134(6)>

b. このケーキはおいしそうです。

「(21)aが何らかの状況(「よく売れている」「みんなが喜んで食べている」など)から話し手が判断したことであるのに対し、(21)bはあくまでケーキの外観について述べているだけである点が異なります」と説明し、(21)'のようにすると「ようだ」が使えないことを指摘している。

(21)'a. *このケーキはおいしいようですが、実はおいしくありません。<134(6)'>

b. このケーキはおいしそうですが、実はおいしくありません。

「そうだ」「ようだ」を比較すると、このような差が見られるわけであるが、例えば (21)'の場合でも、誰かが喜んでケーキを食べている様子を見ている場面であれば、a、b の表現は共に成り立つであろう。

以下、本稿では、両方の表現が成り立つ場面の条件を考察していく。

3. 考察

では、どのような場合に、「そうだ」「ようだ」の両方の表現が成り立つのであろうか。両方の表現が成り立つということは、「そうだ」の使用条件にも「ようだ」の使用条件にも当てはまるということなので、考察に入る前に、先行研究に基づいて、両方の表現が成り立つ場合に関わる「そうだ」「ようだ」の用法を以下のようにまとめておく。

「そうだ」は〈可能世界〉と捉えられる場合に使用でき、「ようだ」は不確かな現実のことと判断できる場合もしくは比喩的に述べる場合に使用できる。

なお、前述のように、「そうだ」「ようだ」には比喩的な用法もあるので、以下では、様態・推量の場合と比喩的な場合に分けて述べる。

まず、様態・推量の場合として、改めて、(1) (再掲)の例から見ていく。

(1) a. 駅前に何かできそうですね。

b. 駅前に何かできるようですね。

この場合は a、b が共に成り立つのは、実際に現場を通ったなど、自分で様子を確認した後の表現としてである。ただし、b の「ようだ」は現実建物に建つと判断できる事実が確認できている必要があるのに対し、a の「そうだ」はまだ建物ができるかどうかはわからないが、古い建物が壊されて更地にされたので何かできるかもしれない、という場合でも使用できる、という差がある。「ようだ」のほうは古い建物が壊されて更地になっただけでは使用しにくい。つまり、「そうだ」「ようだ」が両方とも成立するのは、「何ができるかわからないが建物が建つ」と判断できる条件が存在する場合、ということになる。

では、より現実的に具体化された表現の場合はどうだろうか。ここでは「何か」をより具体性のある「スーパー」に置き換えて、「スーパー」だとわかる工事の場合を想定してみる。

(22) a.? 駅前にスーパーができそうですね。(スーパーだとわかる工事だと不自然さを感じる。)

b. 駅前にスーパーができるようですね。

スーパーだとわかる建設現場を通して、自分で様子を確認している場合は a よりも b のほうが自然である。a の不自然さは「スーパー」と明言することで、菊池の〈可能世界〉として捉えることが難しくなり、〈可能世界〉の「そうだ」に不自然さが生じてくるためと考える。菊池の論に従えば、a は「不確かながら〈現実〉のこと」として捉えられるために「そうだ」が使用しにくくなる、と説明できる。「スーパーか何かできそう」であれば、「まだ現実のものとなっていない次の局面」という〈可能世界〉としての解釈が可能になるため、「そうだ」も使用できる。一方、

現場を確認していない場合、例えばこの辺は人口が急に増えた、現在はスーパーがなくて不便という状況であれば、＜可能世界＞として捉えることができるため、aが成立する。この場合は、「ようだ」はオープン予告の広告を見たなど他から情報を得た上での表現であれば成立するが、人口が増えたなどの間接的な状況だけからの判断であれば使えなくなる。

従って、現実的に具体化して述べることにより、＜可能世界＞とは捉えられなくなる場合は、「そうだ」が成立しにくくなると言える。「そうだ」「ようだ」がともに成り立つのは、(1)のような＜可能世界＞とも不確かな現実のこととも判断できる余地を持つ場面ということになる。

さらに次の例を見てみる。

(23) a.?? そもそも読みちがいがおこりそうな字がいけないのだ。

b. そもそも読みちがいがおこるような字がいけないのだ。<『あたまのサプリ』p.89>

「そもそも」があることにより、実際に読みちがいが起こった事実をもとに述べた表現となっている。そのため、現実として捉えられるので＜可能世界＞の「そうだ」が使いにくい。

次のc、dのように「そもそも」を削除すると、読みちがいが実際に起こったかには触れない表現となり、不確かな現実としても＜可能世界＞としても解釈が成り立つので、「そうだ」「ようだ」がともに成立する。

c. 読みちがいがおこりそうな字がいけないのだ。

d. 読みちがいがおこるような字がいけないのだ。

次の(24)も＜可能世界＞とも不確かな現実とも解釈ができるので、「そうだ」「ようだ」が成り立つ。

(24) a. なんとなく頭が重い。体もだるい。大したことはないが、熱もありそうだ。

<『あたまのサプリ』p.27>

b. なんとなく頭が重い。体もだるい。大したことはないが、熱もあるようだ。

これに「38.5℃」など具体的な現実性を加えると、aの「そうだ」が使えなくなる。

c. * なんとなく頭が重い。体もだるい。大したことはないが、熱も 38.5℃ありそうだ。

「39度は」「39度ぐらい」など、推測できる余地を残した表現であればdのように「そうだ」も使用できる。

d. なんとなく頭が重い。体もだるい。大したことはないが、熱も 39度ぐらいありそうだ。

つまり、様態・推量の場合で、「そうだ」「ようだ」の両方が同じ場面で成り立つのは、＜可能世界＞として解釈ができる余地があり、且つ、不確かな現実としての解釈ができる場合となる。

では、次に比喩の場合について考える。

前述のように「ようだ」には比況の用法⁽⁸⁾があり、「そうだ」にも砂川他が「程度がひどいことを比喩的に表す慣用的な言い方」としているように、比喩的な用法がある。共に比喩的な用法を持つわけであるが、「そうだ」と「ようだ」の比喩⁽⁹⁾には違いがあるのだろうか。また、両方が成り立つ場合はあるのであろうか。

(8) 暑くて死にそうだ。(再掲)⁽¹⁰⁾

(8) は比喩ではあるが、「ようだ」で表すことはできない。

(8) *暑くて死ぬようだ。

では、比喩的な表現の場合、「そうだ」「ようだ」の両方が使用できる場合はないのだろうか。次に両方が使用できる例を見てみる。

(25) a. 呼吸するだけで汗がじわじわ吹き出しそうな蒸し暑い八月半ばの夕方だった。

b. 呼吸するだけで汗がじわじわ吹き出すような蒸し暑い八月半ばの夕方だった。

<『一瞬の風になれ1』p.175>

(25) は「そうな」であれば「実際にはそこまではひどくないがそれほど暑い」という<可能世界>として、「よくな」であれば「実際にじっとしていても汗が出るほど暑い」という不確かな現実として解釈ができるので、両方の表現が成り立つ。

次の(26)も「そうだ」「ようだ」とも使用できる例である。なお、(26) aには「そうだ」が二つあるが、ここでは比喩的な「火を噴きそうな」について取り上げる。

(26) a. 狭い道で追い越しをかけて木に激突しそうになったり、舗装道路が火を噴きそうなスピードで並んで走ったり。 <『一瞬の風になれ1』p.21>

b. 狭い道で追い越しをかけて木に激突しそうになったり、舗装道路が火を噴くようなスピードで並んで走ったり。

ここでは、実際には火を噴いていないけれどそれぐらい速い、という比喩としても、実際に摩擦で火を噴いている現実としても解釈できる。つまり比喩的な可能世界としても、現実としても、成り立つケースである。したがって、「そうだ」「ようだ」とも使用できるのである。

このように、実際には起こりえない、現実性を超えた程度として述べる場合、「そうだ」が比喩的な意味を持つてくる。この「そうだ」の表現が比喩的になる場合であって、話し手の捉え方によっては実際に起こりえるとも判断できる場合に、「そうだ」と「ようだ」の両方が成り立つと考える。

一方、実際には起こりえない場合には、「そうだ」のみ成り立つことになる。次の(27) aは「お腹と背中がくっつく」という現実性を超えた程度を「そうだ」によって表現しているが、現実には起こりえないので「ようだ」は不自然である。

(27) a. お腹がぺこぺこで、お腹と背中がくっつきそうだ。

b. *お腹がぺこぺこで、お腹と背中がくっつくようだ。

しかし、次の(28)のように、現実とは別のものとしての比喩であれば「ようだ」も可能になる。

(28) a. お腹と背中がくっつきそうな感じがする。

b. お腹と背中がくっつくような感じがする。

この場合、aは現実を踏まえた<可能世界>を述べた表現であり、bは現実とは別のものを例えに用いて述べた表現となる。すなわち、「お腹と背中がくっつく」という事態について、aでは仮想的に実際に起こるかもしれないという見方をしているのに対し、bでは現実には起こること

とは別の例えとしての事態、という見方をしている。(28)は両方の表現が成り立っているように見えるが、「そうだ」「ようだ」が用いられている事態に対する話し手の捉え方には違いがあると考える。

以上のことから、比喩的な場合で両方が成り立つのは、話し手が、現実性を越えた程度を思い描いて述べる場合で、且つ、実際に起こりえるとも捉えることができる場合、ということになる。また、実際には起こりえない場合であっても、現実とは別のものを比喩として用いることができる場合には「ようだ」が使えるので、この場合は、「そうだ」「ようだ」で話し手の捉え方が異なるものの、両方の表現が成り立つことになる。

4. まとめ

本稿では、「そうだ」「ようだ」の場面の共通性を明らかにし、どのような場合に両方の表現が成り立つかを考察した。その結果、「そうだ」がいわゆる様態の用法であり、「ようだ」が推量の用法である場合には、<可能世界>としても不確かな現実としても解釈が可能な場合に、両方の表現が同じ場面で成立することがわかった。また、比喩的な場合については、現実性を越えた程度として述べられる場合には「そうだ」が比喩的な表現となり、同じ場面において捉え方によっては現実でありえることとしても捉えることができれば「そうだ」「ようだ」の両方が成り立つこと、また、現実にはあり得ないことでも現実とは別のものとしての比喩であれば「ようだ」が使用できるため、話し手の事態の見方に差があるものの、両表現の使用が可能になりうるものが考察できた。

注

- (1) 森田 (1975)、寺村 (1984)、ケキゼ (2000)、庵他 (2000) など
- (2) くれた会話では一般的に「みたいだ」が使用される。(砂川他 1998、庵他 2000 など) (2) b もくれた会話では「具合が悪いみたいだね。大丈夫？」となる。
- (3) p.134
- (4) 豊田豊子 (1998)、菊池 (2000) など
- (5) pp.166-168 本稿では「そうだ」の形を紹介したが、その他に「... そうにみえる」「... そうにしている」「R- そうになる」「R- そうもない」「R- てしまいそうだ」の形での用法についても説明されている。
- (6) pp.616-623 本稿では「ようだ」の形を紹介したが、その他に「V-る/V-た かのうようだ」「... ような / ... ように」「つぎのように/いかのように」、「... ようなきがする / ... ようなかんじがする」「... ようにおもう / かんじる」「... ようでは」「... ようで (いて)」「... ようでもあり ... ようでもあるし」「... ような ... ような」「... ようなら / ... ようだったら」の形での用法についても説明されている。
- (7) pp.243-244
- (8) 寺村 (1984) は「ようだ」の中心的な意味は「真実に近い」ということだとし、「真実かどうか確信はできないが、自分の観察したところから推しはかって、これが真相に近いだろう」ということが言いたいときは、「推量」になり、「真実ではないことは分かっているが、ある対象が真実と似た様相をもっている」

- ということが言いたいときはいわゆる比況の表現になる」としている。p.243
- (9) 比喩の「ようだ」類には「目を皿のようにして」などの「名詞+のよう」もあるが、「そうだ」には「名詞+そう」（な形容詞は可能）の形はない。本稿では「そうだ」「ようだ」の両方が成立する場合を扱うため、「名詞+のよう」の形での比喩は扱わないこととする。
- (10) 寺村（1984）は、自分の身体の体調について「腹ガヘッテ死ニソウダ」などというのは、「元来は客観的な様態の表現を自分のことという誇張した表現だといってよいと思う」と述べている。p.241

用例出典

- 『あたまのサプリ』五木寛之 幻冬舎文庫
『一瞬の風になれ1』佐藤多佳子 講談社文庫

参考文献

- (1) 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 松岡弘監修（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- (2) 菊池康人（2000）「いわゆる様態の「そうだ」の基本的意味—あわせて、その否定各形の意味の差について—」日本語教育 107号 pp.16-25
- (3) 木下りか（1998）「ヨウダ・ラシイ—真偽判断のモダリティの体系における「推論」—」日本語教育 96号 pp.154-165
- (4) 木下りか（2001）「事態の隣接関係と様態のソウダ」日本語文法 1巻 1号 pp.137-158
- (5) ケキゼ・タチアナ（2000）「(～し) そうだ」の意味分析」日本語教育 107号 pp.7-15
- (6) 砂川有里子・駒田聡・下田美津子・鈴木睦・筒井佐代・蓮沼昭子・ベケシュ・アンドレイ・森本順子 グループ・ジャマシイ編（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版
- (7) 田野村忠温（1992）「現代語における予想の「そうだ」の意味について—「ようだ」との対比を含めて」『国語語彙史の研究 12』和泉書院
- (8) 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- (9) 豊田豊子（1998）「「そうだ」の否定形」日本語教育 97号 pp.60-71
- (10) 森田良行（1975）『基礎日本語 2』角川書店